

東入部遺跡群 2

— 東入部遺跡群第5次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集

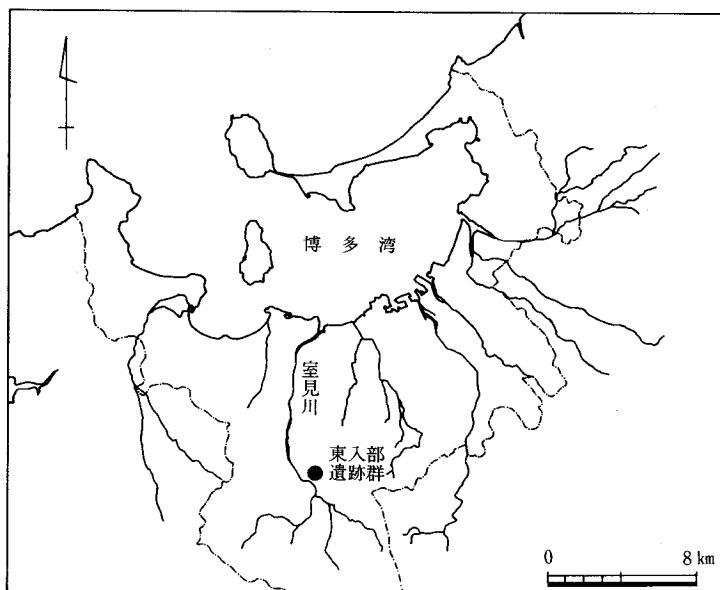
1994

福岡市教育委員会

東入部遺跡群 2

— 東入部遺跡群第5次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集



1994

福岡市教育委員会

序

都市化に伴う下水道の整備は各自治体の懸案事項であり、我が福岡市もその例外ではありません。その反面、下水道整備によって破壊される埋蔵文化財を保護することは、工事の性格上、極めて困難なことです。福岡市では、周知の埋蔵文化財包蔵地で下水道工事を行う場合、可能な限り立会調査を実施し保護に努めています。今回の調査は、下水道工事に伴う迂回路建設に先立って行ったものです。

調査を行った東入部遺跡群は早良平野東部に位置する縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、今回の調査では豊富な鉄製品を持つ弥生時代の集落跡などを発見することができました。

本書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願うとともに、調査に関係された方々のご理解とご協力に対し深く感謝の意を表します。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は平成4年7月21日～8月20日にかけて福岡市教育委員会が行った、福岡市早良区東入部329-1他所在の東入部遺跡群における第5次調査報告書である。
2. 発掘調査は、福岡市下水道局が計画した「早良第1汚水幹線築造工事」に伴う事前調査として実施した。
3. 各遺構はSC(堅穴住居跡)、SK(土坑)、SB(掘立柱建物)、SD(溝状遺構)、SX(鉄製関連遺構)で表記し、それぞれ発見順に別々に連番号をふった。
4. 本書に使用した図の作成、写真的撮影は井澤洋一、吉武学(福岡市教育委員会)が行った。
5. 本書に使用した図の製図は吉武が行った。
6. 本書に使用した方位は全て磁北である。
7. 本書の執筆・編集は吉武が行った。
8. 本報告書に関する記録・遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理される予定である。

遺跡調査番号	9226		遺跡略号	HGI-5
調査地地籍	福岡市早良区東入部329-1他		分布地図番号	85-A-9
開発面積	378.5m ²	調査対象面積	378.5m ²	調査面積
調査期間	1992(平成4年)7月21日～8月20日			

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の位置と環境	1
III.	調査の記録	3
1.	調査の概要	3
2.	遺構・遺物	5
(1)	堅穴住居跡	5
(2)	土坑	11
(3)	掘立柱建物	16
(4)	製鉄関連遺構	18
(5)	その他の出土遺物	20
IV.	おわりに	20

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査地点位置図 (1/1,500)・周辺地形図 (1/600)	2
Fig. 3	東壁南端部土層断面図 (1/80)	3
Fig. 4	検出遺構配置図 (1/200)	4
Fig. 5	SC-01実測図 (1/40)	5
Fig. 6	SC-02実測図 (1/40)	7
Fig. 7	SC-03実測図 (1/40)	8
Fig. 8	SC-04実測図 (1/40)	9
Fig. 9	SC-05・07実測図 (1/40) (折り込み)	
Fig. 10	SC-06実測図 (1/40)	11
Fig. 11	堅穴住居跡出土遺物実測図・I (1/3)	12
Fig. 12	堅穴住居跡出土遺物実測図・II (14~18は1/3、19~26は1/2)	13

Fig.13	SK-01~05実測図 (1/40)	14
Fig.14	SK-06~09実測図 (1/40)	15
Fig.15	SB-01実測図 (1/80)	17
Fig.16	SX-01~03実測図 (1/20)	18
Fig.17	その他の出土遺物実測図 (27~39は1/3、 40~41は1/1)	19

図 版 目 次

PL. 1	1. 上面検出遺構全景 (南から)	2. 下面検出遺構全景 (南から)
PL. 2	1. SC-01 (南から)	2. SC-02 (南東から)
	3. SC-03 (南東から)	4. SC-04 (南から)
	5. SC-05・07 (南東から)	6. SC-06 (東から)
PL. 3	1. SK-01 (東から)	2. SK-02 (北から)
	3. SK-03~05 (北から)	4. SK-08 (南から)
	5. SK-09 (西から)	6. SX-01 (東から)
PL. 4	1. SX-02 (東から)	2. SX-03 (東から)
	3. SB-01 (南から)	4. 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成4年5月18日、福岡市下水道局建設部建設第一課から福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に「早良第1污水幹線築造工事」区域内における埋蔵文化財包蔵地の有無の確認調査依頼が提出された。幹線下水道本体の工事は深々地下をシールド工法により横掘りするものであるため遺跡に対する影響はないものと考えられたが、数百mおきに設置される縦坑部分の仮設迂回路建設が数ヶ所で計画されており、このうちには掘削を伴うものもあったため、協議の結果、3カ所で試掘調査を実施した。そのうち1カ所で遺跡を確認し、遺跡の現状保存の可否について協議を行ったが、隣接する既存道路との比高差が約1m近いため設計を変更することが不可能であり、やむなく記録保存のための発掘調査を行うに至った。

調査にあたっては、下水道局長と教育長の間に調査委託に関する協定書を締結し、平成4年7月21日から8月20日にかけて発掘調査を実施した。

2. 調査の組織

調査工程の都合上、発掘調査は試掘担当者が引き続きこれを行った。

調査委託 福岡市下水道局 局長 佐野均次（前）、鬼木 寛（現）

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉（前）、尾花 剛（現）

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 學

埋蔵文化財第一係長 飛高憲雄（前）、横山邦継（現）

調査庶務 埋蔵文化財第一係 寺崎幸男

調査担当 文化財主事 井澤洋一、埋蔵文化財第一係 吉武学（試掘・本調査とも）

なお、調査期間中、記録的な猛暑に見舞われたにもかかわらず、発掘調査作業に従事して頂いた作業員の方々をはじめ、調査にご協力下さった関係者の皆様に感謝申し上げたい。

II. 遺跡の位置と環境

福岡市の西半分を占める早良平野は、北に向かって扇形に広がる沖積平野で、東は油山山塊、西は飯盛～叶岳山塊を隔てて、福岡平野、今宿平野にそれぞれ隣接している。早良平野の中央にはこの平野を生み出した室見川が蛇行しながら北流しており、早良平尾あたりでは最も東よりのコースを取り油山裾部近くを流れる。調査地点はこの油山と室見川に挟まれた狭い丘陵端部に位置している。調査地点の東側は約100mで油山西側斜面に行きあたり、西側は国道を挟ん

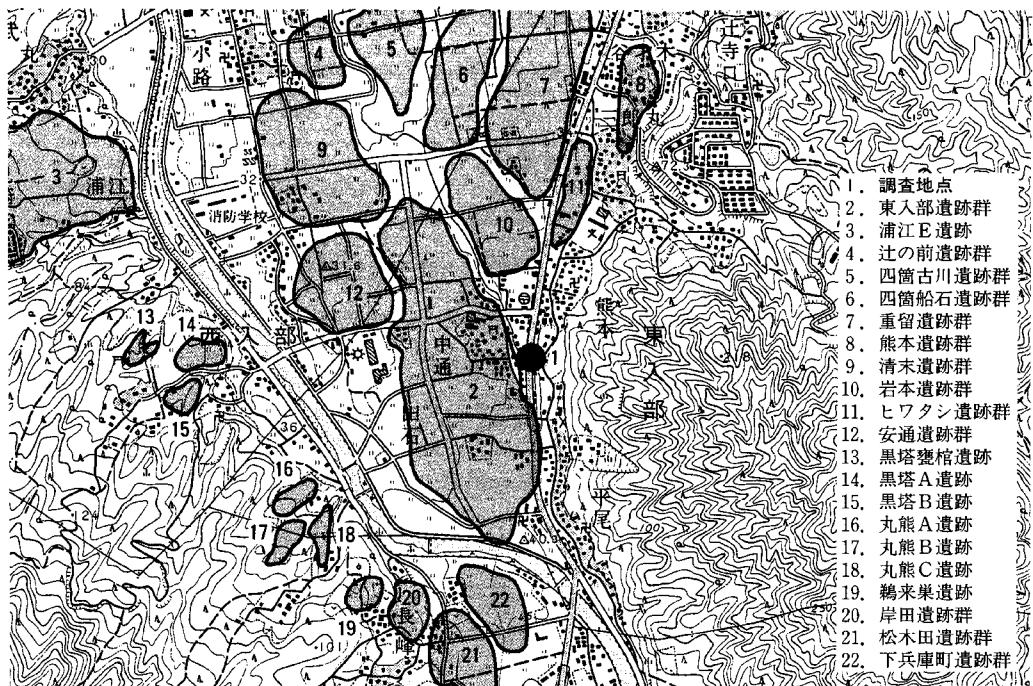


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

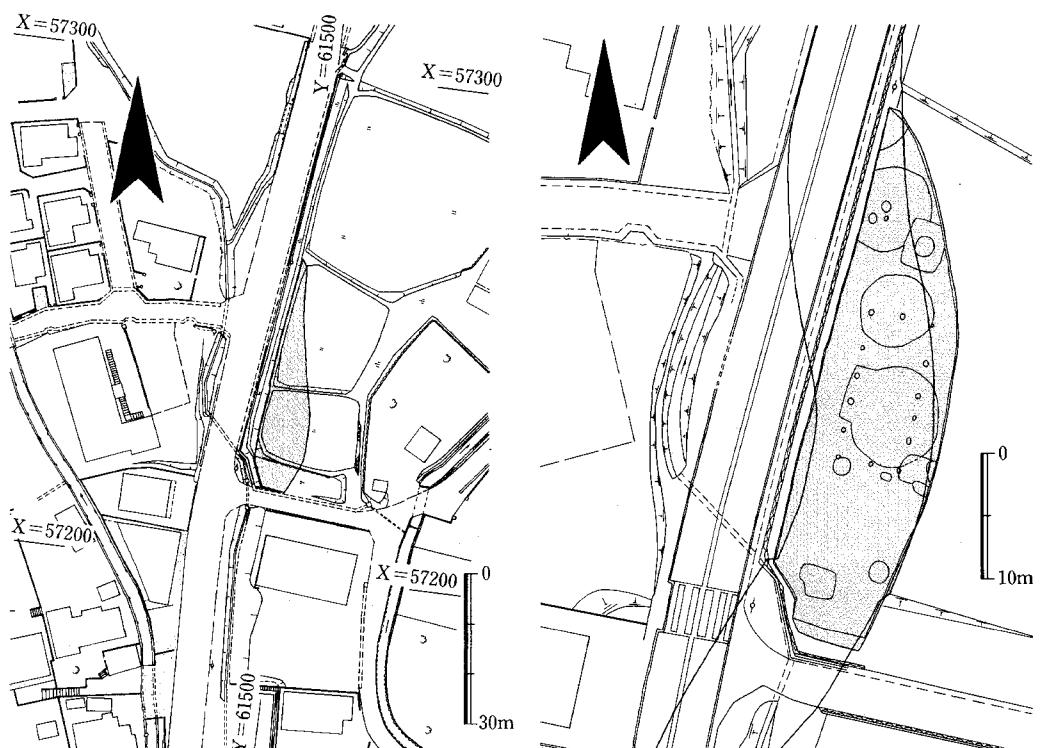


Fig.2 調査地点位置図 (1/1,500)・周辺地形図 (1/600)

で室見川氾濫原となる事が下水道工事の立会調査で確認されている。調査地点の現状は休耕田で、標高は約38mを測る。

周辺では近年、各種開発行為に伴う遺跡調査が集中している。中でも、調査地点から西に室見川を隔てた入部地区は場整備事業に伴う調査では、弥生時代の甕棺墓群や中世の居館跡、製鉄遺構などが発見されており、当調査地点との係わりが深い。また、北隣の東入部遺跡群第4次調査地点では、古代の倉庫群と見られる掘立柱建物群などが発見されている。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査面積は351m²で、調査区は半月形をなしている。地表面から遺構面までの深さは0.6mを測る。遺構面は2面ある。上面は中世、下面是弥生時代中・後期である。上・下面の間には包含層が存在する。この層は中世の整地層と考えられるが、調査区中央部から南側では削平を受け残りが悪く、基盤層が少し下がっている北端部に薄く残っていた。

上面の検出遺構は、掘立柱建物1棟、土坑7基、製鉄関連遺構3基、古道（SD-01）1条、ピット多数である。出土遺物は、土師器・陶器・中国産陶磁器・滑石製石鍋・輪羽口・鉄滓などで、10~14世紀までのものがある。掘立柱建物は14世紀頃のものと思われる。

下面の検出遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑1基、ピット多数である。竪穴住居跡は、平面プランが円形を呈するもの4軒、方形を呈するもの3軒である。円形プランの竪穴住居跡は直径が6~7.5m、深さは0.6mあり保存状態は非常に良好である。方形プランの竪穴住居跡は、円形のものに比べるとひとまわり小さい。出土遺物は弥生土器、石器、鉄製品である。特に鉄製品は、タガネ、ヤリガンナ、刀子、鎌など多種類のものが豊富に出土している。

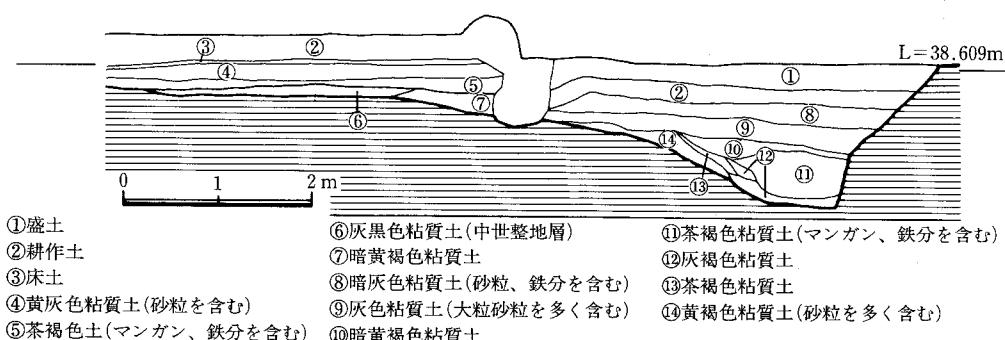


Fig.3 東壁南端部土層断面図 (1/80)

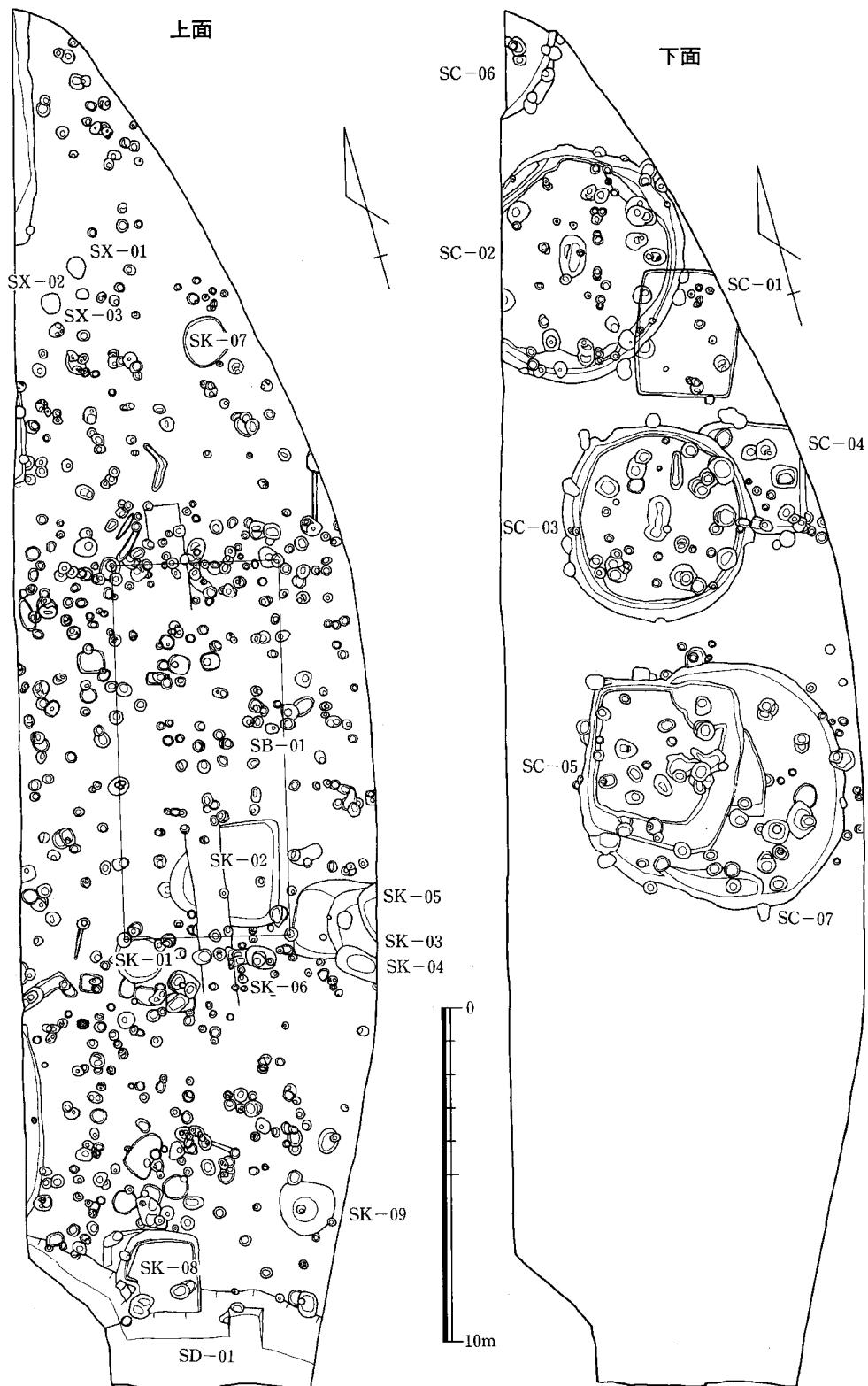


Fig.4 検出構造配置図 (1/200)

2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡

SC-01 (Fig. 5, PL. 2)

調査区の北側に検出した方形プランの竪穴住居跡である。SC-02を切り、中央部をSK-07に切られている。南北3.8m、東西3.1mを測り、南北に長い。深さは0.1mである。床面には14個のピットが住居跡の東側と西側にまとまって検出されたがいずれも浅く主柱穴は明らかにし難い。出土した遺物から見て遺構の埋没時期は弥生時代後期初頭と思われる。

SC-01出土遺物 (Fig.11-1~5, PL. 4)

土器は324点出土した。大半が弥生土器で、他に陶器・土師器片が少数ある。弥生土器には甕、壺、丹塗り無頸壺、蓋などがある。土器以外では鉄片2点、鉄滓・鞴羽口片各1点がある。陶器・土師器・鉄滓・羽口などはSK-07から混入したものである。1~5は弥生土器である。1と2は甕形土器の口縁部と底部である。1はく字形に口縁が開き、口縁内側には不明瞭な稜を持つ。他に口縁内側が丸く稜を持たない甕もある。1・2ともに外面は縦ハケ、内面はナデ調整で、口縁内外は横ナデ。胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好。3は蓋で、口縁近くの対置する位置に2孔ずつを穿つ。胎土は精良、焼成は良好。4は無頸壺で、5はこれの脚と思われ、ともに外面を丹塗りし、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成は悪い。

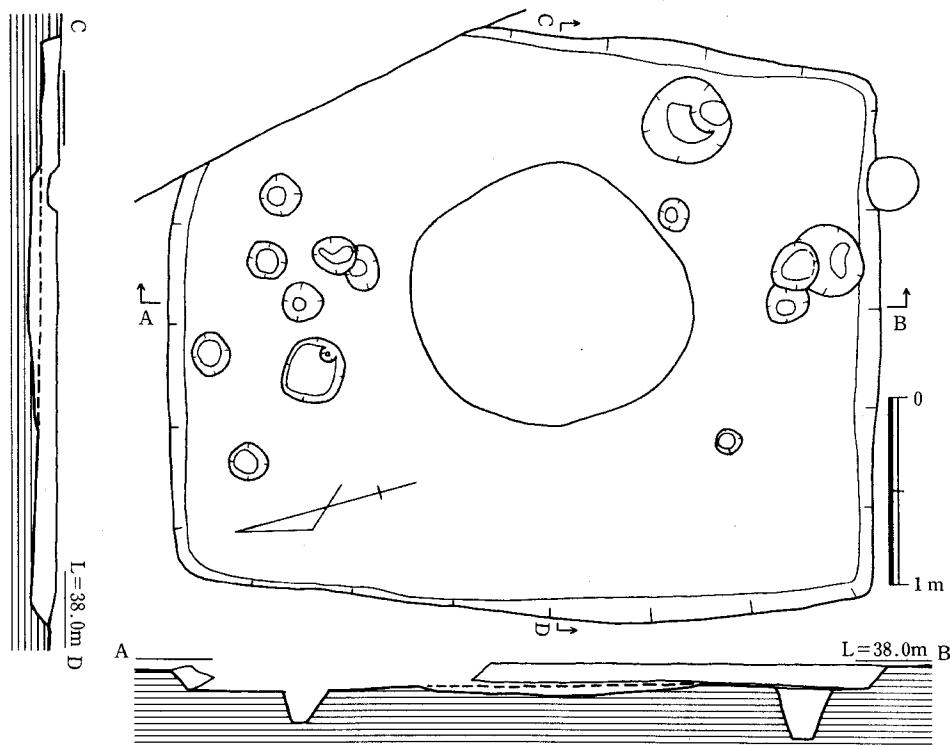


Fig.5 SC-01実測図 (1/40)

SC-02 (Fig. 6、PL. 2)

SC-01に先行する円形プランの竪穴住居跡である。西側は調査区の外に伸びる。南北にやや長く、直径 7 m を測る。遺構の残りは良好で、検出面から住居跡床面まで 0.35 m の深さが残る。住居跡の壁に沿って深さ 0.1 m 前後の壁溝が巡る。主柱穴は 8 本で、壁溝のすぐ内側に配列している。主柱穴のプランは円形で深さは 65~96 cm である。住居跡中央部には楕円形の土坑を掘る。土坑は南北に長く、1.3 m × 0.8 m を測り、深さは 0.26 m で南側に深い。土坑の周囲には焼土が 3 カ所認められた。床面には汚れた地山土（黄褐色粘質土）で床を貼っている。床面出土の土器から見て、遺構の時期は弥生時代後期初頭であろう。

SC-02出土遺物 (Fig.11- 6 ~ 8、Fig.12- 18、22、24、PL. 4)

土器は 136 点出土した。大半は弥生土器で、甕、丹塗り壺、袋状口縁壺、無頸壺があり、他に中世の陶器片 1 点がある。土器以外に砥石 1 点、鉄器（刀子、鉄鎌）、鉄滓などがある。陶器、鉄器、鉄滓は住居跡埋没後に掘られた中世ピットから混入したものである。弥生土器 3 点と砥石 1 点、鉄器 2 点を図示した。6、7 は甕形土器口縁部で、く字形に外に開き、内面に不明瞭な稜がある。6 は口縁直下に断面コ字形の突帯を貼り、内外に化粧土を塗布する。6、7 とともに胎土には砂粒・雲母粒を含み、内面ナデ、口縁内外を横ナデし、焼成は良好。8 は蓋で、口縁近くに小孔を穿つ。胎土は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、外面を丹塗りし、焼成は不良。18 は砥石である。砂岩系の石材を用い、4 面に使用跡がある。22 は刀子で、切っ先を欠く。24 は鎌である。22、24 は混入品で、住居跡に伴うものではない。

SC-03 (Fig. 7、PL. 2)

SC-02 の南側に検出した円形プランの竪穴住居跡である。方形住居跡 SC-04 を切っている。ほぼ正円形を呈し、直径は 5.8~6.0 m を測る。検出面から住居跡床面まで 0.45 m を測る。壁に沿って深さ 0.1 m 前後の壁溝が巡る。床面には 40 個弱のピットが確認できたが、ピットの深さから見て主柱穴は 4 本であると思われる。主柱穴の位置にはそれぞれ二つ（計 8 つ）のピットがあるが、床面精査時には両者に明確な切り合いを認めることはできなかった。住居跡の建て替えを示すものか、もしくは主柱を補助するための柱を立てた穴であるのか不明である。主柱穴は円形プランで深さは 79~86 cm、主柱穴に隣接する柱穴の深さは 60~78 cm を測る。住居跡中央部には楕円形プランの土坑を掘る。土坑は南北に長く、1.4 m × 0.7 m、深さは 0.25 m を測る。土坑の周囲には焼土が 3 カ所認められた。床面は汚れた地山土（黄褐色粘質土）でならしている。出土土器から見て、遺構の時期は弥生時代後期初頭であろう。

SC-03出土遺物 (Fig.11- 9 ~ 10、Fig.12- 17、PL. 4)

出土遺物は弥生土器 73 点、砥石 1 点、鉄製品 1 点である。弥生土器には甕、壺、蓋、鉢がある。鉄製品は鎌かと思われるが鋒がひどく図化し得ない。9 は蓋である。口縁近くに 2 孔を穿

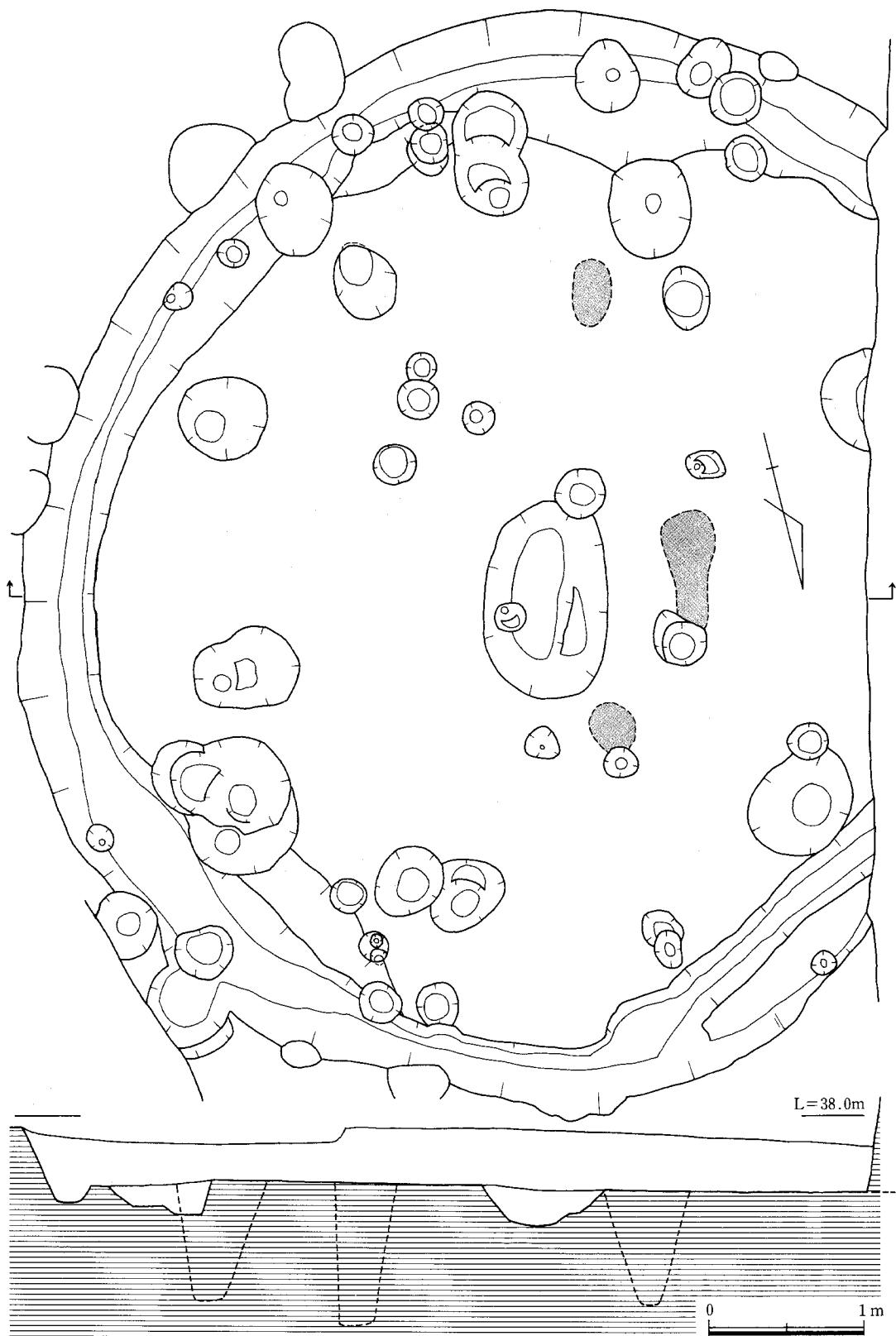


Fig.6 SC-02実測図 (1/40)

アミ部は焼土

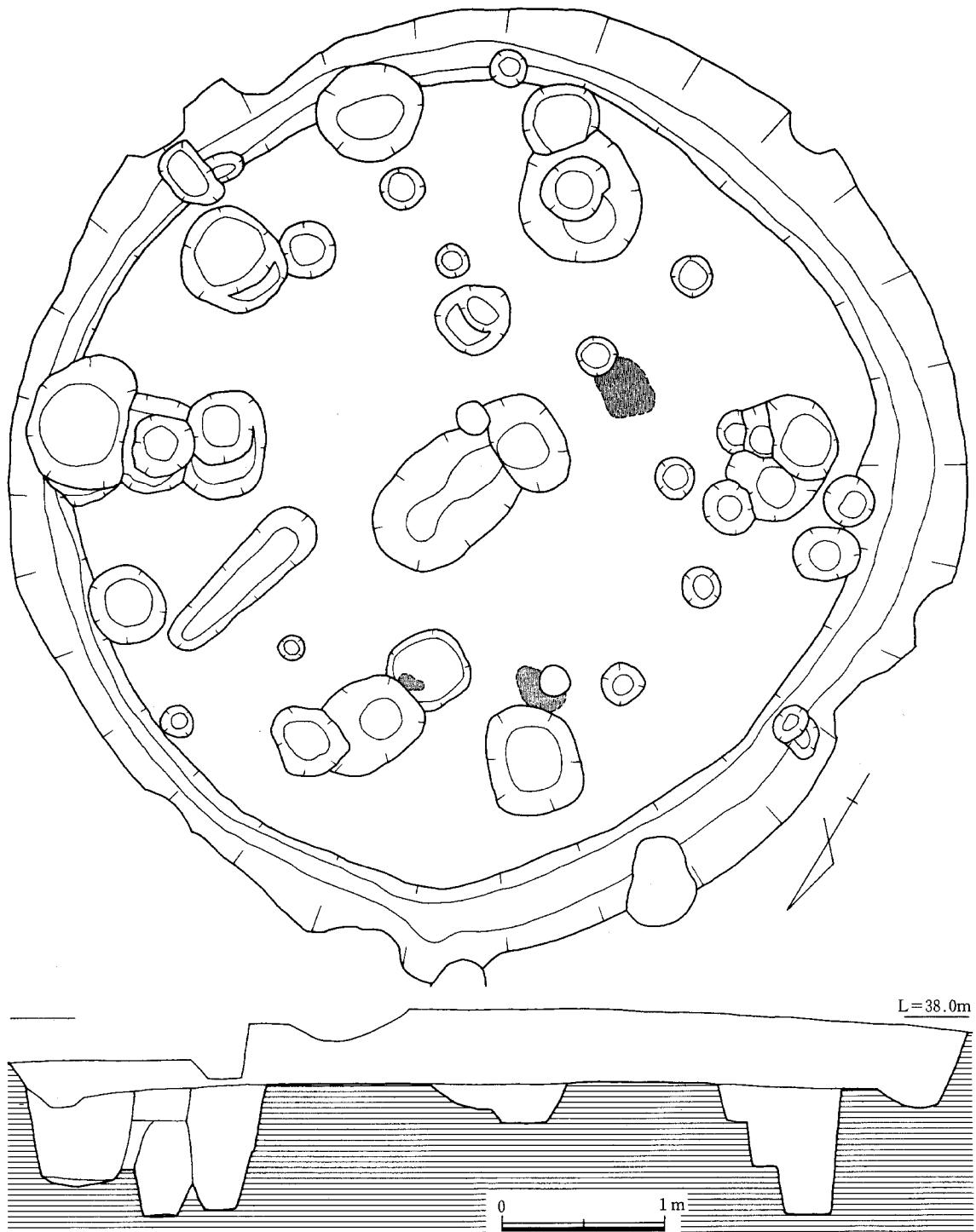


Fig.7 SC-03実測図 (1/40)

つ。胎土は精良で雲母粒を含み、外面丹塗りで、焼成不良。10は鉢である。胎土は精良で、外面に縦ハケを施し、焼成は良好。17は磁石の小片である。図化していないが、弥生土器の甕形土器には口縁部内面に稜を持つものがある。

SC-04 (Fig. 8, PL. 2)

SC-03の東側に検出した方形プランの竪穴住居跡である。SC-03に切られ、西側は一部調査区外にある。南北3.3mを測る。検出面から床面まで0.25m。主柱穴は2本で、深さは47~55cm。住居跡中央部には楕円形プランの土坑を掘る。土坑は南北に長く、1.4m×0.7m、深さは0.25mを測る。出土土器のほとんどが細片であるため、明確な時期を決め難い。

SC-04出土遺物

出土遺物は土器片18点、鉄片1点である。土器は全て細片で、弥生土器（甕、鉢）以外に陶器が1点混入している。

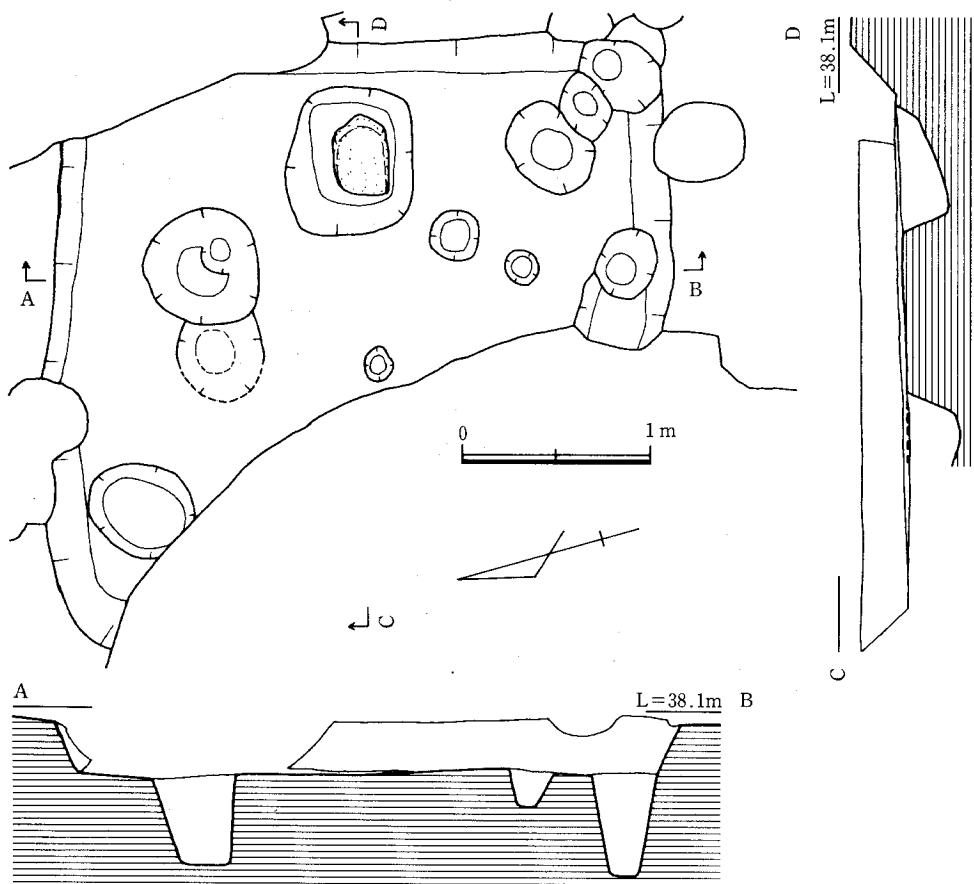


Fig.8 SC-04実測図 (1/40)

SC-05・07 (Fig. 9、PL. 2)

調査区の中央で検出した竪穴住居跡である。2軒の住居跡が切り合うが、検出時の誤認により同時に掘削してしまい、床面精査時に2軒であることを確認した。SC-05は方形プラン、SC-07は円形プランで、床面のレベルはSC-05がやや低い。また、SC-05東側外に方形の張り出しがあり、別の住居跡のコーナー部分である可能性がある。SC-05は東側に少し開く方形プランをなし、東西4.8m、南北5.2mで、深さは0.6mを残している。壁に沿って深さ0.05m前後の壁溝が巡る。床面には多数のピットがあるが、SC-07に伴うと思われるものを除くと、4本柱に復元できそうである。主柱穴の深さは29~81.5cmである。住居跡中央部の東寄りの位置に焼土を検出した。床面は汚れた地山土でならしており、これをはぎ取ると床面中央部がやや盛り上がった状態になる。SC-07は円形プランをなし、東西約8m、南北7.3mで、検出面から住居跡床面まで0.55mを測る。東西にやや長く、西側に拡張している可能性がある。壁溝はない。床面には多数のピットが検出されたが、住居跡の壁沿いに円形に並ぶ深いものを主柱穴とすれば、9本柱となり、西側には2列並ぶ。主柱穴の深さは37~75cmで、60cm前後のものが多い。床面の1カ所に焼土を検出した。中央土坑、貼床は明確でない。SC-05・07の床面出土の土器はともに弥生時代中期末~後期初頭の特徴を示しており、明確な時期差を見出し難い。

SC-05・07出土遺物 (Fig.11-11~13、Fig.12-14、15、20、21、23、26、PL. 4)

出土遺物は弥生土器119点と石器2点（石斧、敲打具）、鉄器4点（タガネ、刀子、鎌）である。弥生土器は甕、壺、蓋、鉢、器台などがある。11~13は弥生土器である。11は手捏ね土器で、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好である。12は蓋で相対する位置に2孔ずつを開ける。胎土は精良で雲母粒を含み、焼成は良好。13は甕形土器の口縁部で、く字形に開く。外面縦ハケ、内面ナデ、口縁内外横ナデで、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好。14、15は石器である。14は石斧で上下端は折れている。敲打と研磨により仕上げる。15は石斧を敲打具に転用したものである。14、15とも安山岩製である。20、21は刀子である。20は切っ先、21は中茎であるが厚みが異っており、別の製品である。23はタガネであろうか。先端は鋭利さがなく、基部は叩かれて潰れている。26は鎌である。先端と基部の一部を欠く。

SC-06 (Fig.10、PL. 2)

調査区北端で一部を検出した。円形プランであろう。検出面からの深さは0.65mである。壁溝はない。弥生時代中期末の土器が出土した。

SC-06出土遺物 (Fig.12-16、19、25、PL. 4)

土器は68点出土した。中世陶器1点が混入している。弥生土器には甕、丹塗り壺、丹塗り袋状口縁壺などがあるが、いずれも小片のため図化していない。甕形土器の口縁部は丸く開き、内面に稜を持たないタイプである。石器は石錘1点、鉄器はヤリガンナ・鎌各1点と鉄片1点



Fig.9 SC-05・07実測図 (1/40)

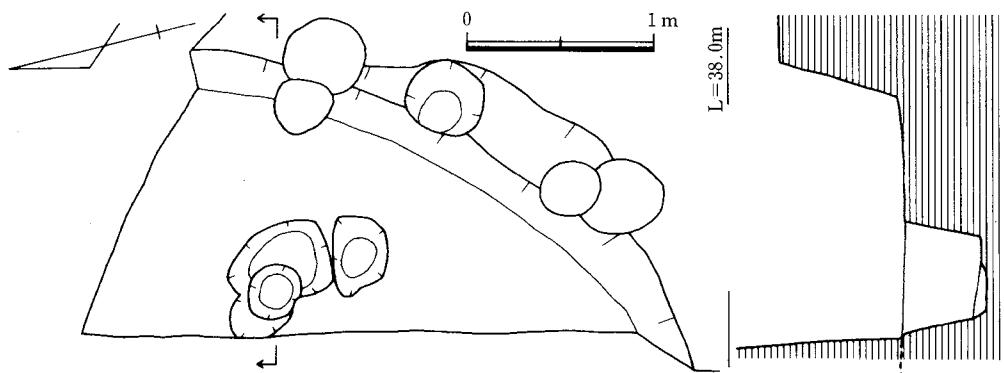


Fig.10 SC-06実測図 (1/40)

が出土した。16は安山岩系の偏平な石材を打ち欠いて作った石錘である。19はヤリガンナである。横断面は三日月形をなし、先端の反りはほとんど無い。

(2) 土坑

SK-01 (Fig.13、PL. 3)

調査区の南寄りの位置に検出した円形プランの土坑である。直径は1.45mを測り、ほぼ正円形をなす。検出面から土坑底面まで0.2m。出土土器から見て、13世紀頃の遺構と思われる。

SK-01出土遺物 (Fig.17-29、PL. 4)

出土土器は25点で、弥生土器、土師器、陶器がある。土師器には壺、甕がある。壺の底部は回転糸切りで、明確な法量を計測できるものがないが、口径は13.5~14cm前後であろう。土器の他、石鍋片1点が出土した。29は土師器高台付皿で、口径14.2cmを測る。胎土は精良で、雲母粒を含み、焼成は良好である。遺構の時期を示す遺物ではない。

SK-02 (Fig.13、PL. 3)

SK-01の北東に検出した。中央は試掘時に削平している。東は方形、西は円形をなす不整形プランを呈しており、別々の遺構かもしれない。東西3.3m、南北3.2mを測り、深さは0.2m。遺構は中世の所産だが、明確な時期は不明である。

SK-02出土遺物

土器片41点が出土した。底部糸切りの土師器があるが、小片のため図化していない。

SK-03 (Fig.13、PL. 3)

SK-02の東側に検出した。SK-04・05に切られており、東側は調査区外に伸びる。隅丸方形プランと思われ、南北2.3m、深さは0.2mを測る。SK-01に近い時期の遺構と考えられる。

SK-03出土遺物 (Fig.17-36、PL. 4)

土器片75点、石鍋片1点、鉄滓がある。土器には弥生土器、土師器、陶器、青磁・白磁などがある。土師器は壺、小皿があり底部は糸切りするが、法量は明確でない。青磁は内面に櫛画

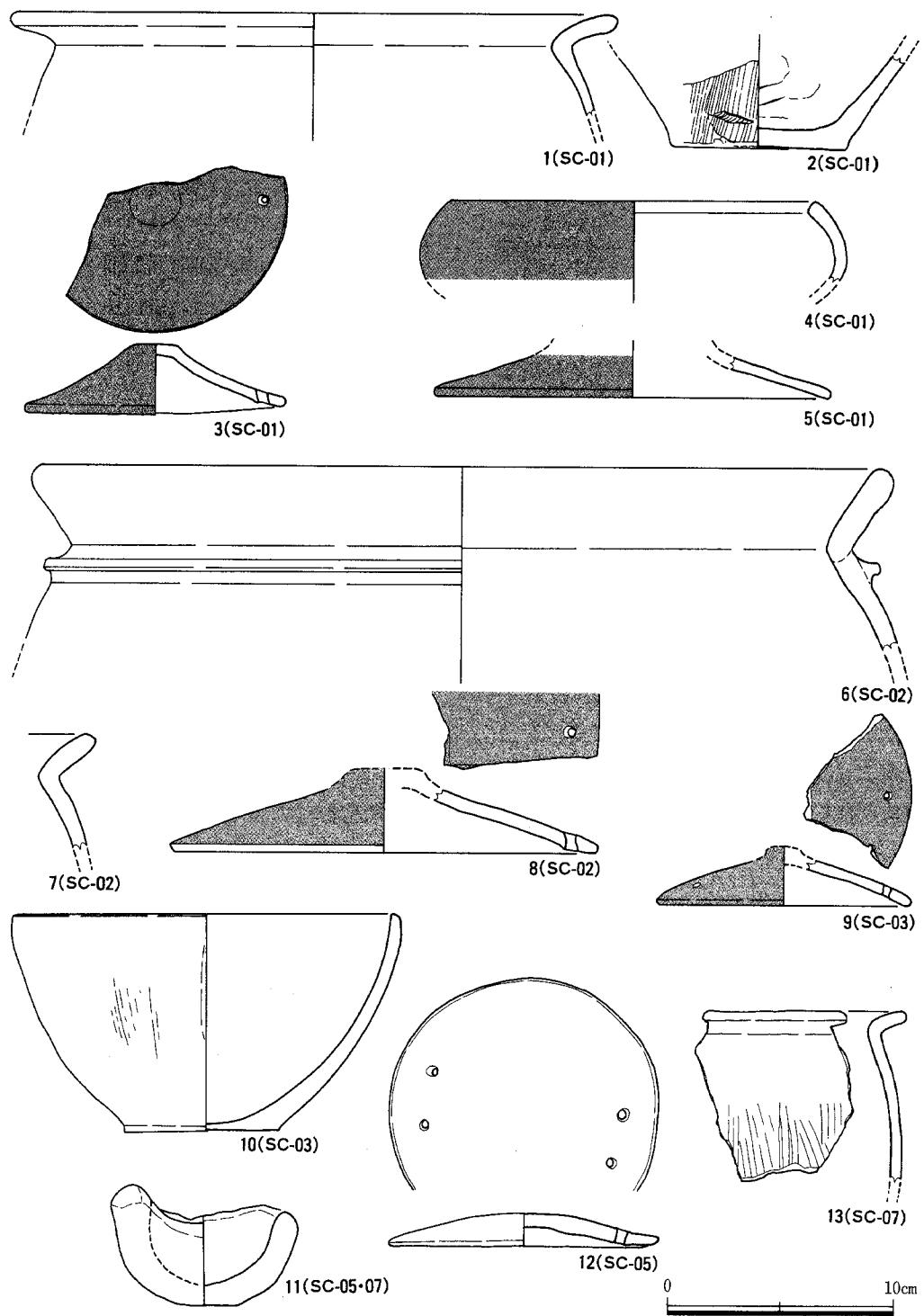


Fig.11 壺穴住居跡出土遺物実測図・I (1/3)

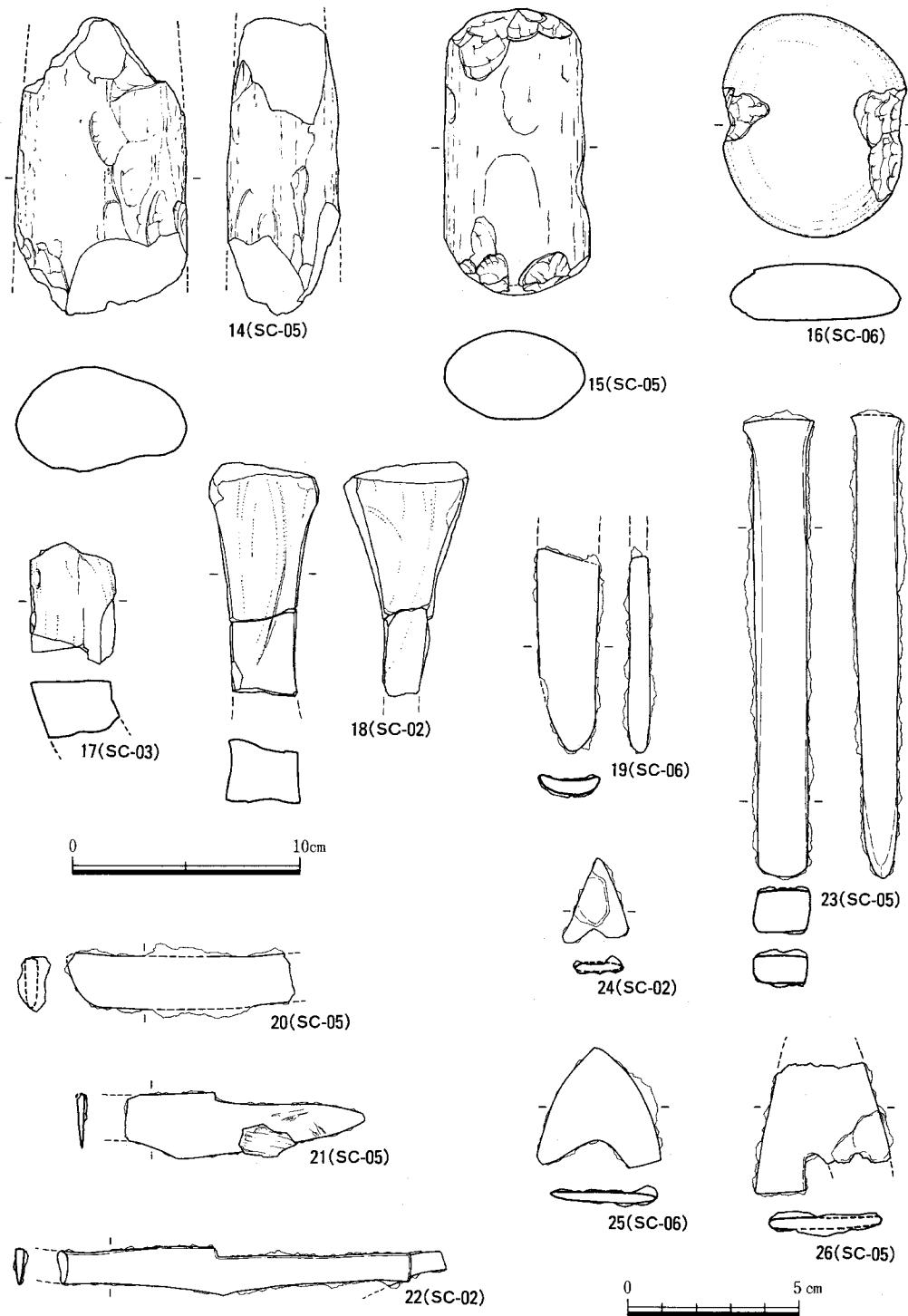


Fig.12 積穴住居跡出土遺物実測図・II (14~18は1/3、19~26は1/2)

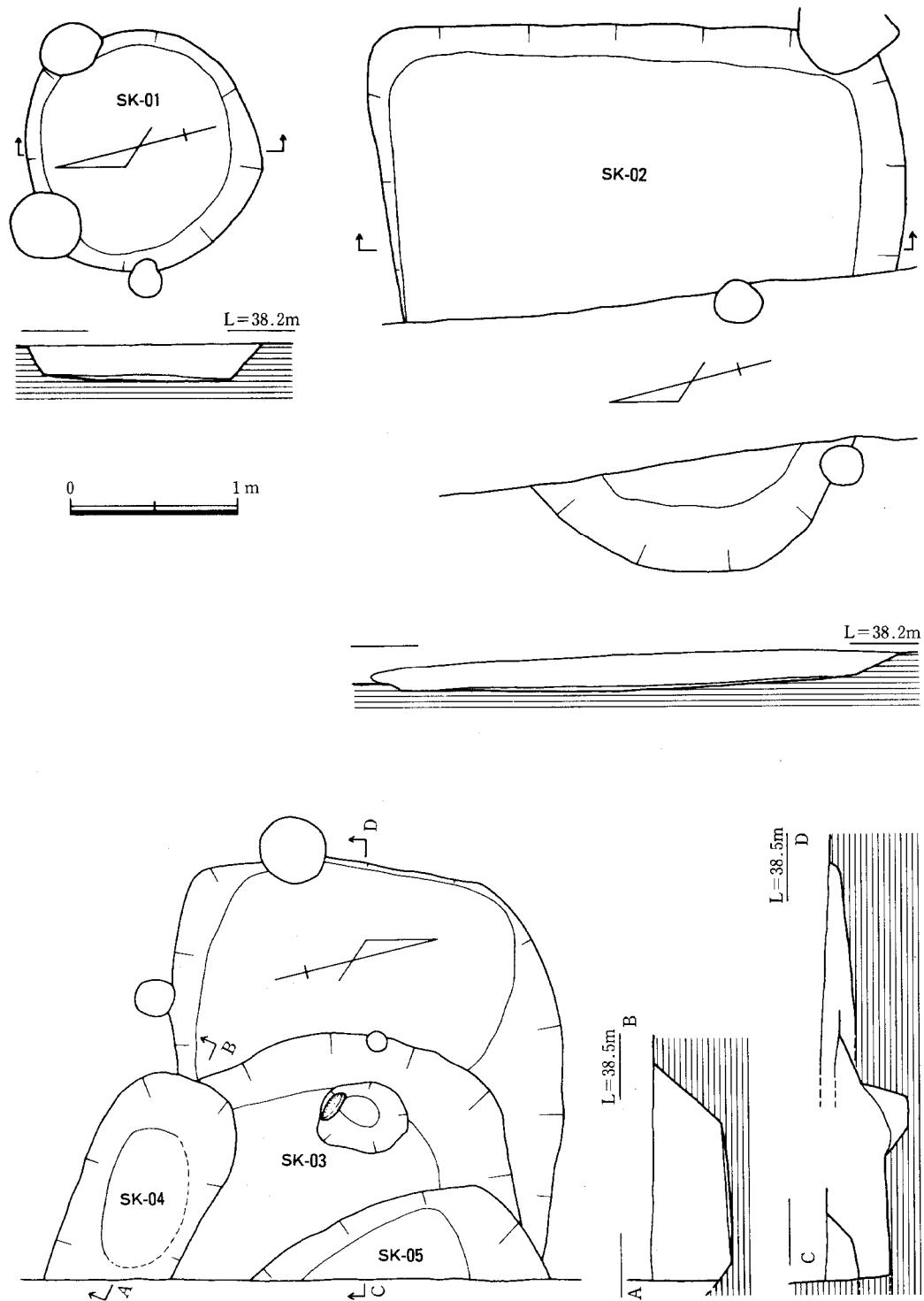


Fig.13 SK-01~05実測図 (1/40)

文を施す龍泉窯系の碗である。出土遺物のほとんどは小片である。36は白磁皿の底部片である。胎土は白色、釉薬は淡い青白色で、底部をヘラ削りし、内面には櫛画き施文する。

SK-04 (Fig.13, PL. 3)

SK-03を切る長円形プランの土坑で、東は調査区外に伸びる。短径は0.8m、深さは0.45m。出土遺物はないが、中世の遺構であろう。

SK-05 (Fig.13, PL. 3)

SK-03を切る土坑の一部で、大部分は調査区外にある。出土遺物は、白磁片1、陶器甕2点で、小片のため図化していない。中世の遺構である。

SK-06 (Fig.14)

SK-02の南に検出した小型の土坑である。長円形プランで、長径0.9m、短径0.65m、深さ0.2mを測る。出土遺物は土器片が5点で、いずれも小片であるが、中世のものであろう。

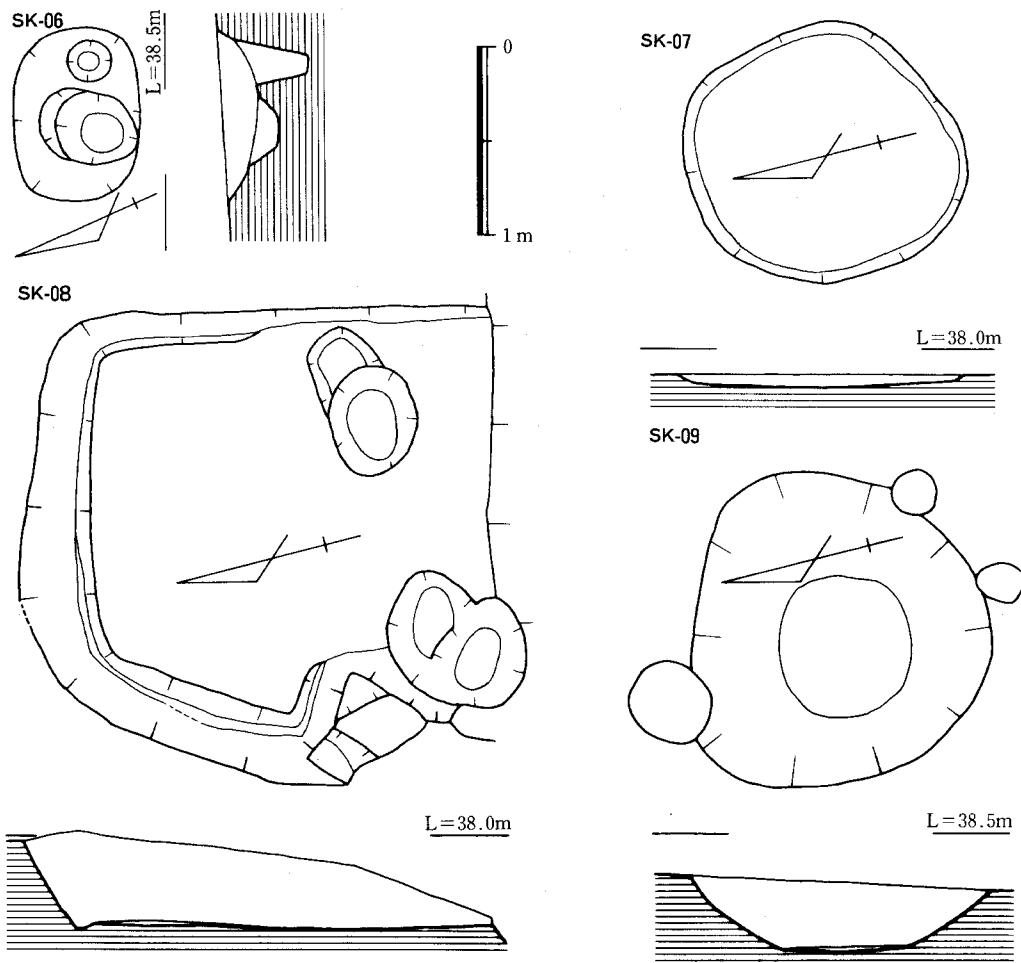


Fig.14 SK-06~09実測図 (1/40)

SK-07 (Fig.14)

調査区北側に検出した円形プランの土坑で、SC-01を切る。直径は1.4~1.5m、深さは0.05mを測る。覆土からは土器小片2点が出土したのみだが、中世の遺構と思われる。SC-01で出土した陶器片、轍羽口、鉄滓はこの遺構に伴うものと思われる。

SK-08 (Fig.14、PL. 3)

調査区南端に検出した。南側は削平されている。方形プランで、東西長2.5m、深さ0.45mを測る。底面には浅い壁溝が巡っており、柱穴2つを検出した。小型の住居跡の可能性がある。弥生時代中期末~後期初頭の土器が68点出土したが、全て小片で図化できるものがない。

SK-09 (Fig.14、PL. 3)

SC-08の東側に検出した円形プランの土坑である。直径1.6~1.7m、深さ0.3mを測る。出土遺物は土器小片4点のみである。中世の遺構であると思われる。

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物は1棟を検出したのみである。他にもピット多数を検出したが、調査区が狭く、掘立柱建物としてまとめるに至らなかった。

SB-01 (Fig.15、PL. 4)

調査区中央部で検出した。桁行方位をN-16°-Eにとる南北に長い建物である。桁行5間、梁行2間で、桁行全長は11.16m、梁行全長は5.1mを測り、桁、梁とも柱間がほぼ等間隔に整然と配置されている。柱穴は全て円形プランをなし、直径は34~55cmで、40cm前後のものが多い。柱穴の深さは50~86cmで、柱穴底面レベルは比較的揃っている。柱痕跡の残っている柱穴が5個あり、柱の直径は14~18cmである。柱穴覆土は灰褐色を呈しており、暗褐色を呈する弥生時代の遺構とは明らかに異なっており、検出が容易であった。14世紀頃の遺構であろう。

SB-01出土遺物 (Fig.17~28、37、PL. 4)

出土遺物は弥生土器の小片が多く、それに混じって土師器、陶器、白磁等が出土した。28は土師器皿である。ロクロは時計回り。底部は糸切りで板压痕はない。胎土に雲母粒を含み、焼成は良好で、やや須恵質をなす。口径9.6cm、器高1.6cmを測る。37は白磁皿の底部片である。高台は張り付けて、内外に斜めに面取りする。胎土、釉は淡い青みを帯びた白色で、高台外面の面取り上端まで施釉する。図化していないが、内面に印花文があり、釉薬が濁っているためはっきり見えない。枢府系の白磁で、14世紀頃のものとされている。

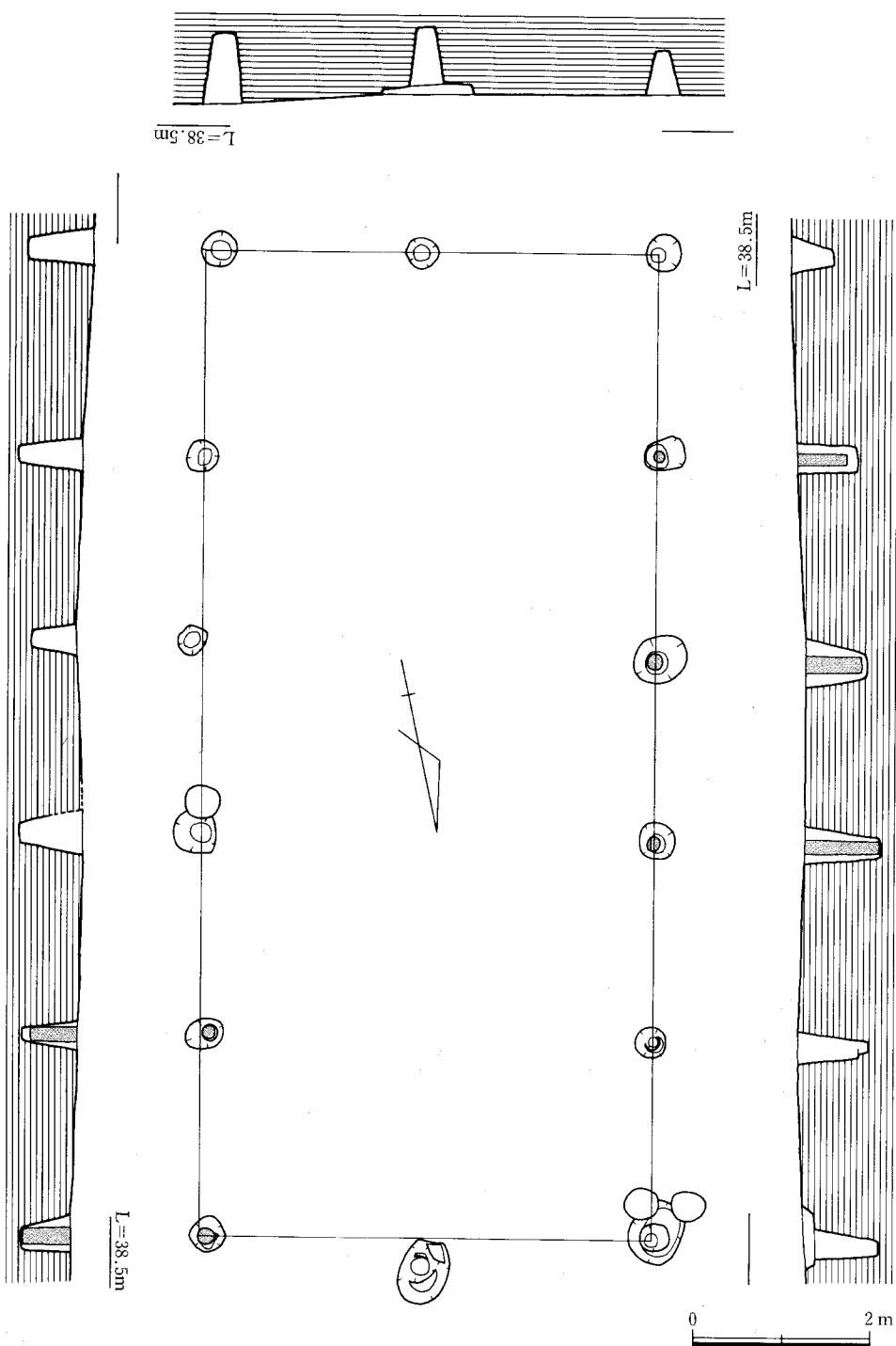


Fig.15 SB-01実測図 (1/80)

(4) 製鉄関連遺構

調査区北端付近で3基検出した鋳治炉の炉床ないし廃棄坑と思われる遺構である。

SX-01 (Fig.16, PL. 3)

3基のうち最も北側に位置する。円形プランの土坑の内部に、土器、焼土、鉄滓、鞴羽口片等が混じり合って詰まっていた。土坑の直径は0.8~0.9mで、深さは0.15mを測る。廃棄土坑と考えられる。中世の遺構だが、明確な時期を示す出土土器がない。

SX-01出土遺物 (Fig.17-31, 38)

出土土器は弥生土器、土師器の小片が25点で、他に鞴羽口、鉄滓等が少量出土した。31は土師器甕で、口縁が外反して開き、なで肩である。外面に刷毛目が僅かに残り、内面はヘラ削りしている。胎土には砂粒・雲母粒を多量に含んでおり、焼成はやや不良である。復元口径は28cm前後となる。38は鞴羽口で、上下が共に折れている。直径8cmの粘土棒に径3cmの孔が空く。

SX-02 (Fig.16, PL. 4)

SX-01の南西に検出した。円形プランの土坑内に黄色粘土を詰めている。土坑は南北にやや長く、0.78×0.65m、深さ0.14mを測る。粘土は良く焼けており、中央部が少し窪む。鋳治炉の基底部分と思われる。遺物は粘土上面で鉄滓を少量得たのみである。

SX-03 (Fig.16, PL. 4)

SX-01の南に位置する。小型土坑に黄灰色粘土と鉄滓が詰まっていた。土坑は東西に長い楕円形で、0.53×0.37m、深さ0.16mを測る。廃棄坑であろう。出土遺物は鉄滓少量が出土したのみである。

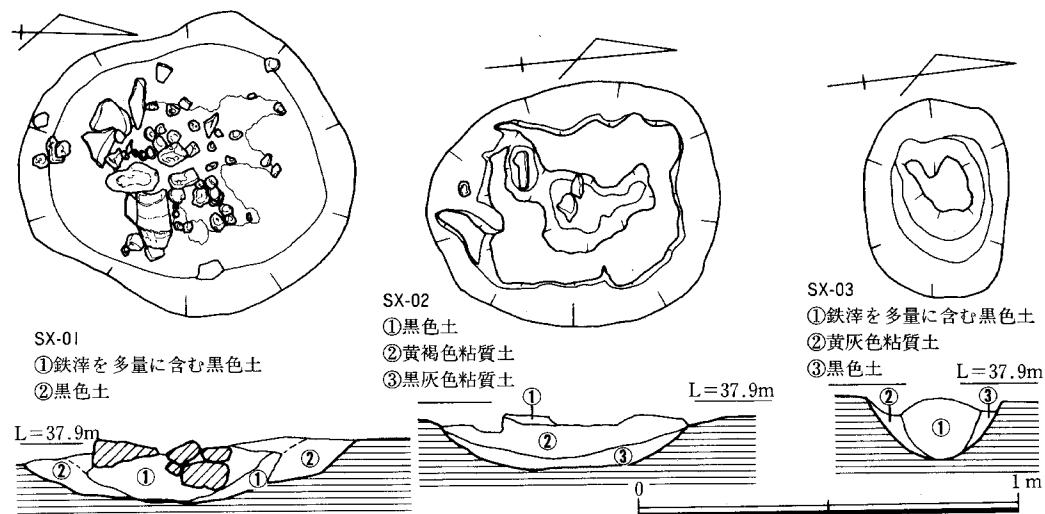


Fig.16 SX-01～03実測図 (1/20)

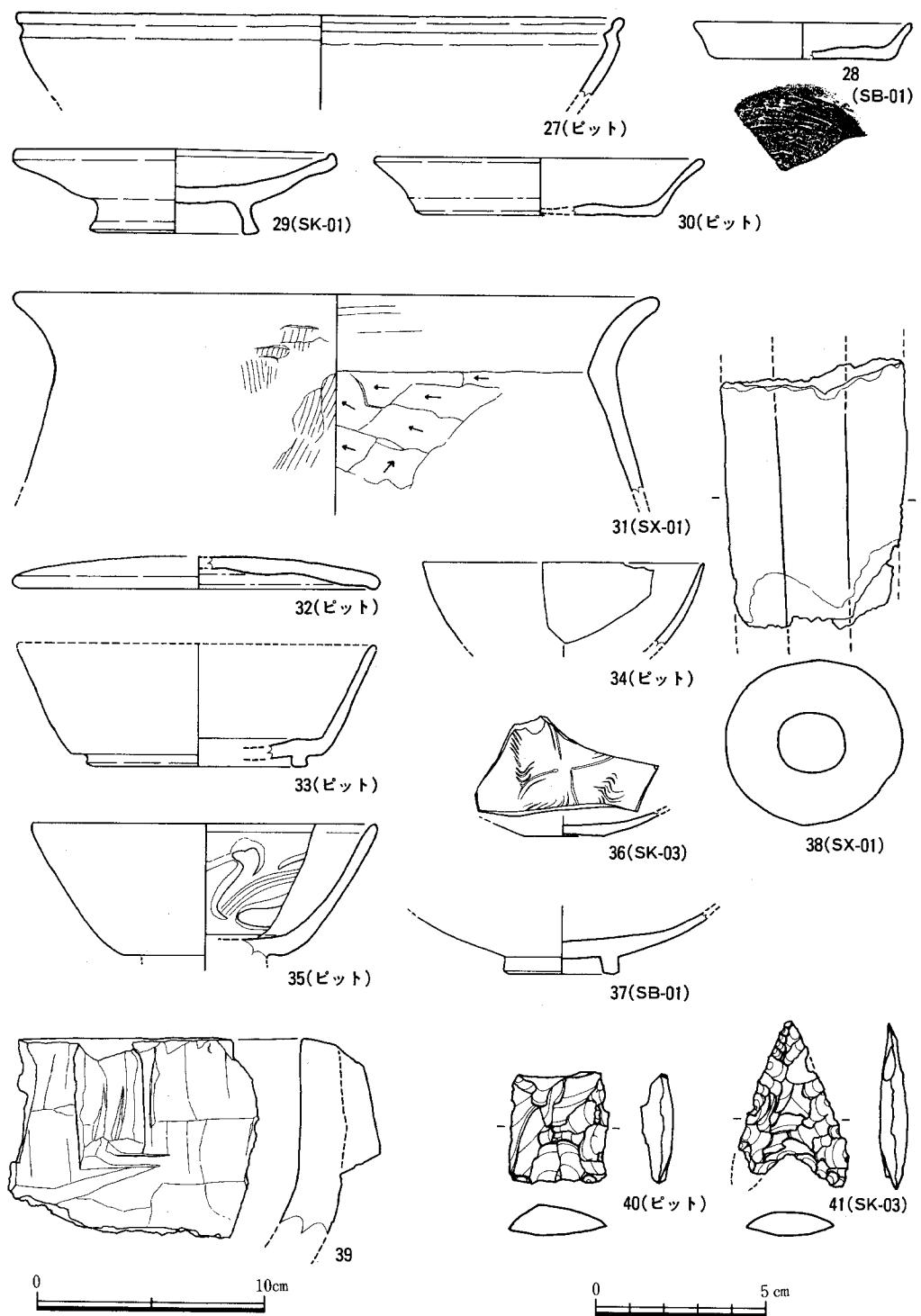


Fig.17 その他の出土遺物実測図 (27~39は1/3、40~41は1/1)

(5) その他の出土遺物 (Fig.17-27、30、32、33、34、35、39、40、41、PL. 4)

ピット等から出土した遺物のうち、図化できるものを掲載した。

27は縄文土器である。晩期の浅鉢型土器の口縁部の小片で、不正確ながら復元口径は26cm前後。頸部で内側に一段屈曲して開き、口唇部内面に沈線を施す。内外面ともよく研磨され、燻して黒色にしている。胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は悪い。30は土師器坏で復元口径14.5cm、器高2.5cm。底部は糸切りで、板目圧痕がつく。胎土は精良で雲母粒を含み、焼成は良好。32は須恵器蓋。偏平な器形をなし、口縁端部は少し下方へ垂れる。胎土は精良で、焼成良好。復元口径は16cm。33は須恵器坏で、体部は直線的に開き、底部には輪高台を貼り付ける。胎土に細砂粒を僅かに含み、焼成は非常に良い。復元口径15.8cm、器高9.7cm。34は越州窯系青磁碗の小片である。体部は少し内湾気味に開き、胎土は淡い灰褐色を呈し、オリーブ色の釉薬をかける。復元口径は12.4cm。35は龍泉窯系の青磁碗である。体部は内湾気味に開く。内面口縁部直下の沈線と底部境めの段との間にヘラと櫛書きで施文し、淡い緑色の釉薬を全面に施す。39は滑石製石鍋の口縁部片である。外面には口縁直下に縦長の把手を付ける。40・41は黒曜石製の石器である。40はサイドブレイドか。両面に細かな剥離を施す。41は石鎌で、片脚を欠く。

IV. おわりに

今回検出した遺構は、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡7軒、土坑1基（住居跡の可能性あり）、中世の土坑8基、掘立柱建物1棟、製鉄関連遺構3基である。出土遺物にはそれ以外に縄文時代晩期、平安時代のものがあるが、当該期の遺構は検出されなかった。

弥生時代の住居跡は、狭い調査面積にもかかわらず、多数が密集して検出でき、濃密な集落が存在したことを伺わせる。また、ヤリガンナ、鎌、タガネ、刀子などの鉄製品の出土量が通常の住居跡をはるかに上回っており、他の集落に比べてかなり高度な鉄生産技術を持っており、優位な位置を占める集落であったことが想定される。

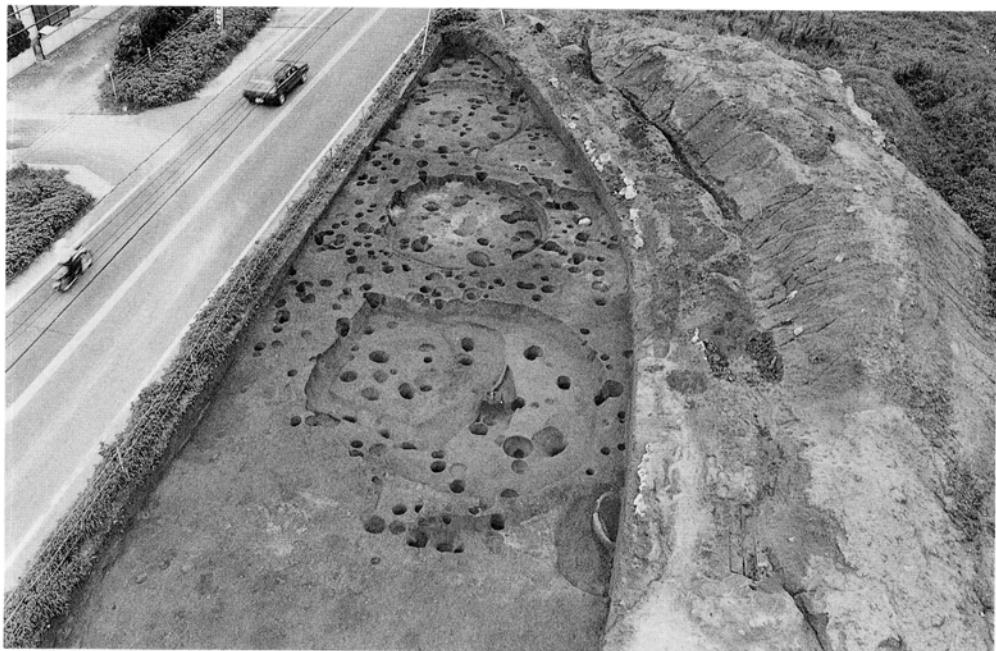
PLATES



発掘調査風景



1. 上面検出遺構全景（南から）

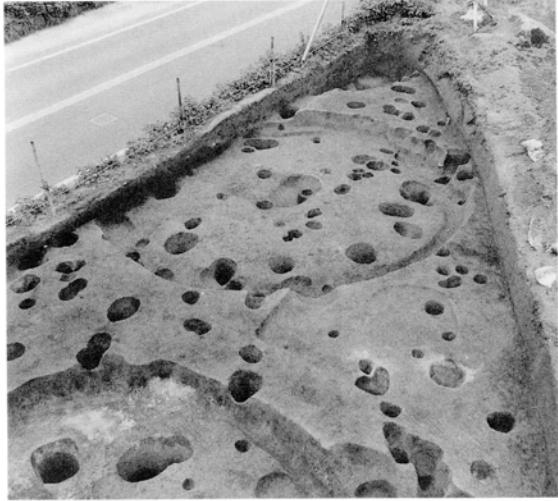


2. 下面検出遺構全景（南から）

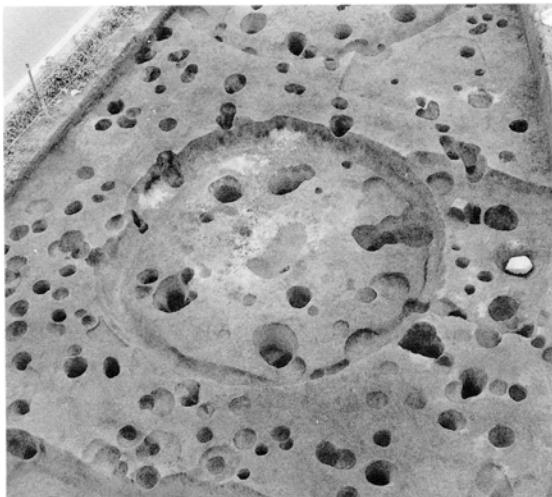
PL.2



1. SC-01 (南から)



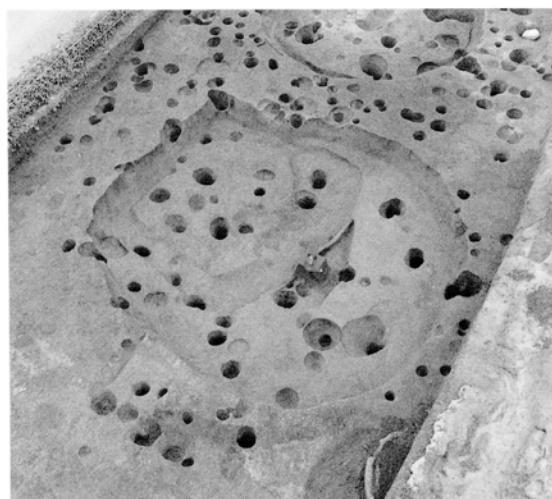
2. SC-02 (南東から)



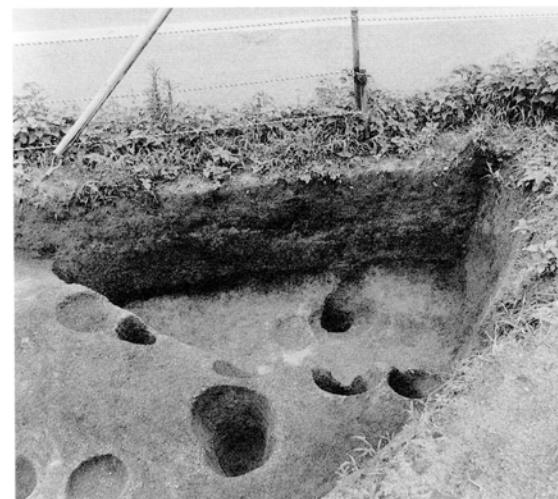
3. SC-03 (南東から)



4. SC-04 (南から)



5. SC-05・07 (南東から)



6. SC-06 (東から)



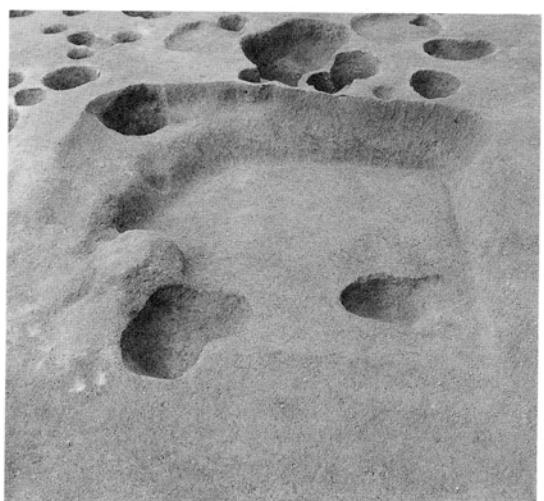
1. SK-01 (東から)



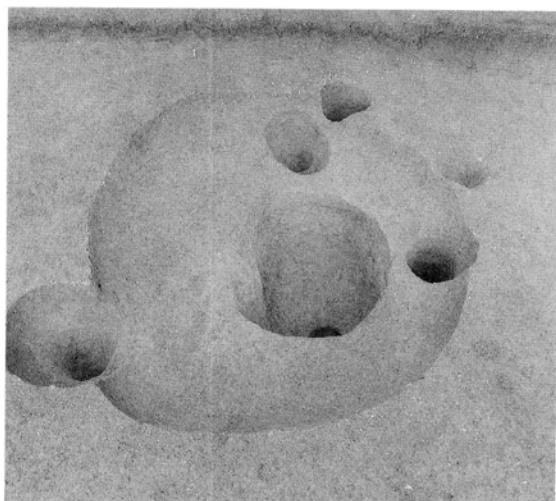
2. SK-02 (北から)



3. SK-03~05 (北から)



4. SK-08 (南から)



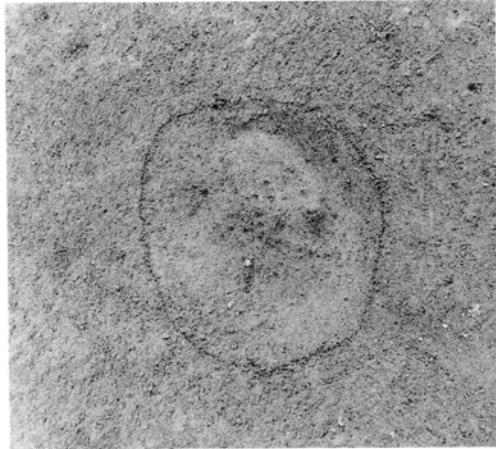
5. SK-09 (西から)



6. SX-01 (東から)



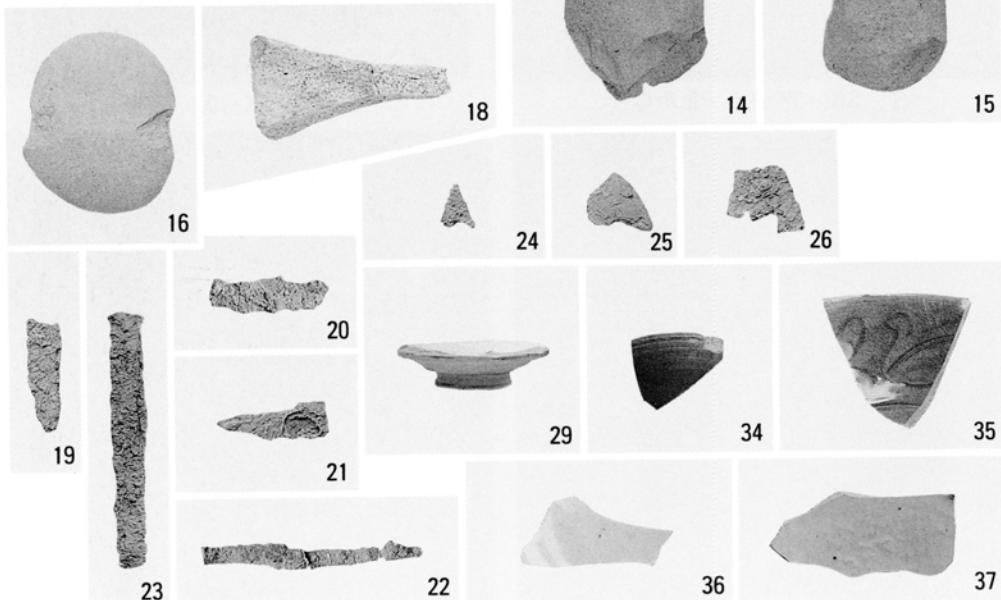
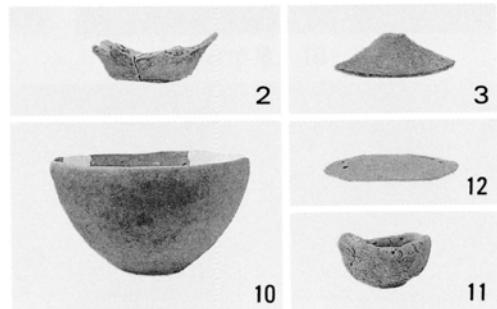
1. SX-02 (東から)



2. SX-03 (東から)



3. SB-01 (南から)



4. 出土遺物

東入部遺跡群 2

— 東入部遺跡群第5次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集

1994. 3. 31

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区榎田2丁目2-65

